

令和三年 初春

鎌倉樂しむ会 史跡散策資料

『北条義時物語』 (下)

鎌倉幕府の執権制度を確立した男

*参考文献

鎌倉観光文化検定テキスト

武家の古都、鎌倉 山川出版社

承久の乱 文春新書 本郷和人

承久の乱 中公新書 坂井紘一

北条義時 吉川弘文館 安田元久

中世社会のはじまり 岩波新書

五味文彦

一冊でつかむ日本中世史 平凡社

武光誠

日本の歴史 院政から鎌倉時代

小学館 本郷恵子

鎌倉樂しむ会企画責任者

清藤 孝 編

鎌倉幕府

乗っ取りの序奏

武家の棟梁・源頼朝が五十三才のこれから！という時に落馬という不慮の事故から、鎌倉幕府の体制は慌ただしく波立ってきた。

年若く幕政には未経験の源頼家が二代將軍に就任したが、北条時政以下の幕府創設以来の御家人には不安材料が多く、すぐさま宿老十三人の合議機関を創設し、御家人には最大の問題となる「土地の裁決」など、この機関に委ねることとし、早くも二代將軍頼家を幕府の「お飾り」に祭り上げてしまった。この時北条義時は三十八才の最年少で合議機関に参画することになり着々と北条家の地盤を固めることになっていきます。

北条家の次の標的は「梶原景時一族」の抹殺です。梶原景時は頼朝時代には、最高に気に入られた御家人の一人で、彼の讒言により、義経以下数多の御家人が苦境に悩まされていたことも事実であった。結城朝光も景時の讒言により、危うく誅殺されそうになるが、御家人六十六人の連判状により、景時は

逆襲され、京に一家を引き連れて上る途中、駿河国にて、北条時政の陰謀により、一族は全滅の憂き目となってしまふ。

そして、最大のライバル「比企家」が次の標的になります。この比企家は、源頼朝の流人時代二十年間を食料など送り続け、娘は頼朝の腹心・安達盛長に嫁がせ頼朝の身の回りを世話させるという鎌倉幕府成立の陰の功労家と言っても過言でない位の大恩人です。

しかし、二代將軍頼家に孫娘を嫁がせ次期將軍となる「一幡」が誕生し六才になっていた。このままでは一幡が三代將軍を継ぐことになれば、比企家が將軍の外戚となり、北条家の立場は微妙なものとなっていくのは必然です。北条時政は策略を巡らし、この「比企家」を根絶やしの行動に出ます。その時北条義時も動員し、六才の幼い一幡は討ち取られ比企家は鎌倉幕府から消え去っていくのです。

丁度、その時、二代將軍頼家は病に陥り、この比企家の滅亡を知らされていなかった。

間もなく頼家は病も癒えたが、尼將軍政子・義時も話し合ったと思われるが、時政は政所別当・大江広元と謀り、二代將軍頼家の病状悪化を理由として、伊豆は修善寺に幽閉し、その後暗殺してしまうのです。最大のライバル「比企家」と御家人には不人気な二代將軍頼家を抹殺した北条家は、ここでまた一步幕府内の地盤を固め、北条時政による執権政治が始まったとみていいと思われます。

すぐさま三代將軍には源実朝を擁立し、京の朝廷に対し鎌倉幕府の継続をアピールしていくのです。この三代將軍実朝の擁立の時、北条時政の後妻・牧の方が、娘の嫁ぎ先である京都守護の平賀朝雅（源義光の子孫）を鎌倉幕府將軍へという思惑の行動があった。

どうやら、この件には、夫の時政も関与していると北条義時と尼將軍政子は、ただちに行動を起こし、父の時政を領国の伊豆に追放。將軍に仕立てられた平賀朝雅の誅殺に京へ刺客を放ち実行してしまう。

しかし、三代將軍実朝は、時の朝廷のしき

たりに^{あこが}憧れ、後鳥羽上皇より和歌の手ほどきを受け、蹴鞠^{けまり}などに興じ貴族社会の世界に入っていた。妻には公卿の坊門信清の娘・信子^{めと}を娶り、益々、武家の棟梁の座から離れていく。

さらには官位の上昇を願い、執権の義時からみたら、いずれ朝廷の後鳥羽上皇に取り込まれていく危惧を抱かせることとなっていた。

また、後継者のできない実朝をみて、尼將軍政子と執権義時は將軍継嗣問題に直面していた。義時と話し合い、政子は熊野詣を理由に京に赴き、卿二位と会い後鳥羽上皇の親王東下の密約を果たしてきた。

そのような鎌倉幕府の内情を察知して、侍所^{たねなが}別当の和田義盛の甥・胤長^{たねなが}らが二代將軍頼家の遺児・千手^{せんじゅ}を將軍に擁立すべく暗躍^{ろけん}していた。このことが露頭^{ろけん}するに及んで、鎌倉市内最大の合戦が、幕府軍と和田軍の間で激闘が繰り広げられ、当初優勢の和田軍は、実朝^{にしき}の錦^{みはた}の御旗を掲げた義時の幕府軍に徐々に

追い詰められ、最後の戦場・由比ヶ浜に於いて義盛の戦死により、和田義盛一族はことごとく滅ぼされてしまう。それにより、義時は侍所・別当に就任し名実ともに鎌倉の武士の頂点に立たんとしていた。

このような一連の行動に密着し生命の危険も伴って戦ってきた執権義時にとって、源氏將軍の存在の意義は、はたして？となったのではないだろうか。

三代將軍実朝が、いつかは朝廷の後鳥羽上皇の臣下となり「武家政権による鎌倉幕府」の存在も危うくなり、この鎌倉幕府を支えている御家人たちの「土地」の安堵も間々ならなくなつたならば、この將軍実朝の存在は？と鎌倉幕府と北条家の行く末にポイントを置くのは自明の理であろうと思われる。

このような状況を鑑^{かんが}みて悩みに悩みぬいた執権義時は、綿密な計画を立て將軍実朝の暗殺の機会を待っていたのではなからうか。その時機到来が、鶴岡八幡宮における雪の降り積もる日の右大臣昇進拝賀の礼の日であ

つたのである。

ここにおいて、執権北条義時は源氏將軍の根を絶やし、北条時代の幕を開けていくのでした。

朝幕関係の危機

源頼朝に青年時代より近侍^{きんじ}し頼朝の政治的姿勢や手法、また時には、その立居振舞までも学んできたであろう北条義時は五十七才の円熟した政治家となってきた時、三代將軍実朝の惨劇が起こった。

この事件発生後、実行犯である公暁^{くぎょう}は、事件の内容を明かすことなく、三浦義村の勢力によりすばやく誅殺され真相は闇の中に埋もれてしまうのです。

鎌倉幕府には大きな事件であったが、幕府内の政治的問題においては、関連する動揺は起こらなかった。これは「武家による武家のための政治」を目指す執権北条義時は三浦義

村等の御家人との間に綿密な暗黙の了解の打ち合わせていたのではないかと推察されるのです。

しかし、源氏の正統が途絶えたとはいえ、これをチャンスと捉えて、頼朝と比較的に近い血縁関係にある源氏一門の中から、阿野時元が駿河国で承久元年(1219)二月に挙兵し、駿河国深山に軍勢を集めたが、義時の命を受けた金窪行親かくなくぼゆきちかの攻撃を受け、僅か十日にして敗北し自殺においこまれてしまう。

義時は、この際にあたり、源氏一族の將軍継承の動きを封じ、そのため、源氏の血縁者で將軍継嗣の動きをする可能性のあるものを一掃することに努めていきます。承久二年(1220)四月には頼家のもう一人の遺子・禪暁が京都において暗殺されたが、この事件もまた執権義時の策謀であったと思われる。

義時はこのような源氏一族を弾圧するとともに親王將軍の実現に力を入れていく。そのため京都朝廷との間で、この將軍継嗣問題の交渉が急務となっていくのです。

義時は、実朝の急死を京都に伝えるため、正月二十八日に加藤判官次郎を使節として派遣したが、この使者は、二月九日に鎌倉に帰ってきた。そして、京都における朝廷の実朝事件に関する反応や世相の報告の行った。

京都の人々にとって、実朝の暗殺は予想外の事件として受け止められ、その成り行きに大きな不安を抱えたようであると同時に、他方では鎌倉幕府の内部崩壊がはじまるのでは？との希望的観測も行われていた。

このような京都の状態を報告された義時は、鎌倉幕府の安泰を誇示することに迫られ、それは、京都の鎌倉幕府内部崩壊の希望的憶測を粉碎し、従前に変わりなく京都公家政権に対し鎌倉幕府の優位性を堅持していくという表明でもあった。

そのためには、これまで尼將軍政子と京の卿二位きやうのにとで密約された皇族將軍を実現させることが急務となってきた。

そこで、義時は京都へ御家人・二階堂行光

を二月十三日に急派し、かねての尼將軍政子と卿二位との密約にもとづいて、後鳥羽上皇の皇子・六条宮雅成親王ろくじょうのみやまさしげ、冷泉宮頼仁親王れいぜいのみやよりひとのいずれかの鎌倉幕府將軍を上奏させたのです。

皇族將軍の実現に対する鎌倉幕府の申し入れについては、後鳥羽上皇は皇子を鎌倉幕府の將軍に据えたなら、将来には日本が二つに分裂することになってしまうという懸念を示し院当局は評定の結果、その実現に保留の態度をとることに決した。

すなわち院当局は鎌倉幕府の基礎が少しは揺らいできたものと判断し、これまでの尼將軍政子と卿二位との密約は破棄され、皇族將軍の東下は直ちには行わぬ旨回答することに決したのです。ここにおいて、鎌倉幕府の將軍継嗣問題は暗礁に乗り上げてしまいました。

院当局は將軍東下問題とうかの回答を兼ねて実朝の弔問のために、院使・藤原忠綱を鎌倉に送った。院使は三月八日に鎌倉へ到着し、翌

九日には執権義時を訪ね実朝の弔いを行った。と同時にその際、頼朝以来の院当局への地頭の解除を求めてきた。この地頭問題は鎌倉幕府の根幹にかかわる事であり、この院側の要求に義時は断固拒否する態度をとったのであった。

また、院使・忠綱の使命は、実朝死後の鎌倉幕府の内情を探らせることも含まれていたのは当然のことである。

このような状況に変化してきた京都の態度を憂慮した義時は、二月十四日には、伊賀光季（義時の後妻・伊賀局の兄）を京都守護として特派し、京都の治安を維持させ、さらには院当局の監視に当たらせたのです。

また、この伊賀光季の守護だけでは不安と考えたのか政治家義時は、この月二月の末には、さらに大江親広（大江広元の子）を京都守護として上洛させ院当局への監視を強化させ万全を期したのであった。

執権義時は院当局への將軍継嗣問題

の要求と地頭問題に対する回答の鎌倉幕府の答使として、弟の北条時房を三月十五日に一千騎の兵を従わせ上洛させたのです。この際の時房の軍勢は鎌倉幕府の威容と威圧を誇示することは言うまでもなく、また、時房は再び皇族親王の東下を再交渉した。そして、院当局から要請の地頭問題は一步も譲れないことを回答したのです。

しかし、地頭問題を完全に拒否された院側は、その態度を一層硬化させ、当然、皇族親王の東下問題は院側としても一步も譲れないこととなってしまった。

こうして、院側と鎌倉幕府の間の皇族將軍問題と地頭問題は双方の解決をみる目途のたたないまま、公武の対立は表面化し、その溝は深まっていくのです。

摂関家將軍

三寅（頼経）の誕生

院と鎌倉幕府の交渉が行き詰まることとなった義時は、院の態度の急変を察知し、将

軍の後継者を速やかに決定して、今一度御家人の結束を執権北条義時のもとに纏める必要を痛感していた。そこで、三浦義村の建議により、従来の皇族將軍案に拘泥せず、左大臣藤原道家の子で、僅かに二歳であった三寅（頼経）を迎えて鎌倉の主・將軍とすることに決定した。

藤原道家は、頼朝時代の親幕府派の巨頭であつた元関白・九条兼実の孫であるが、その母は、頼朝の同腹の妹と公卿・一条能保との間にできた女である。そしてこの道家と、これも親幕府派の公卿・西園寺公経の女との間に生まれたのが三寅である。従って三寅は頼朝の妹の曾孫にあたり、また親幕府派の人々の流れを受け継いでいるといっても過言ではないと考える。

義時以下の幕府当局者は、そうした三寅に着目して、政略的にも大きな無理があつても將軍の後継者の座に据えていくのである。

院側としてはこれには必ずしも賛成ではなかつたが、反対する理由も見えだせないまま、承久二年（1220）六月には、これを認許

したのです。

そこで、三寅は七月には鎌倉に下って鎌倉幕府將軍の座に就きます。幼少の間は尼將軍政子が代わって政治を聞き、義時が將軍家のことを奉行する体制としていったのです。

この三寅の將軍誕生は、執権義時と尼將軍政子との間で、半ば強引ともいえるくらいの敏速・適切な行動で始まり、執権義時によって幕府内の統制はより強固なものとなっていくことになるのです。ここから、鎌倉幕府の混乱動揺は見られず、院側が秘かに期待していた動揺は起こらなかったのである。

歴史家の先生の多くは、この時の執権義時はその器量と、さらには綿密な計画に基づく政策や実行力が、見事に御家人社会の統制をより強固なものに維持したと指摘しています。

後鳥羽上皇による

幕府打倒の行動

後鳥羽上皇は、和歌や詩・けまりなどのほ

か、武芸をも好み、相撲・水泳・競馬くらべうまなど熱心に鍛錬していた。公事くじ（朝廷で行われる儀礼・行事）の再興にも心を砕き、興味のある役どころは自らが演じてみせたりしていたという。あらゆることに秀でひいて何事をも成しうるといふ支配者を目指していたものと見うけられる。

「新古今和歌集」は文化の王道を極めんとする後鳥羽上皇の存在の大きさを表しているのだと主張する歴史学の先生も存在しています。

後鳥羽上皇は頼朝時代には天皇として君臨し、建久七年（1192）には頼朝へ征夷大將軍の官位を与えている。同九年（1194）には讓位を行い、院政を開始、土御門天皇せんそが踐祚せんそしています。

頼朝の時代から鎌倉幕府と相対し、いつの日か鎌倉幕府より、その王権を奪還しようといふ目論見もくろみか、鎌倉が三代將軍実朝となり、その実朝が京好みの將軍で、ここに目をつけた後鳥羽上皇は、公卿の坊門信清の娘が嫁い

だことを祝い、実朝の和歌にも興味をもち、いずれかの機会に徐々に後鳥羽上皇の傘下さんかに収めていこうという私案は、その計画として練られていたものと思われまふ。

そして、実朝の希む官位のぞを矢継ぎ早に授与したのも、その計画上のことであつたろうと思われる。しかし、実朝の横死により、この計画は無惨にも頓挫とんざしてしまう。

ここで、後鳥羽上皇は、いよいよ討幕の方針を秘かに立て武力での実行に移すべく行動にはいつていくのです。まず、先に院は、従来からの直属の武力・北面に加えて西面の武士を置いて、武力組織の拡充を図っていく。新しい鎌倉將軍が東下した翌七月に、大内守護の源頼茂よりしげが、上皇の意に反したとの些細な理由により、西面の武士により誅殺されるという事件が起こった。これは鎌倉と関係の深い頼茂が上皇の計画を察知したため、秘密漏洩ろうたひを防がんとしたものと云われている。

また、別の見方として、上皇やその近臣たち、これによって鎌倉の動静を探る意味を

もって起こしたとも書かれているが、だとすれば、かかる試みを決行することは、すでに幕府と武力抗争を起こす確固たる準備が整い、上皇の討幕計画は着々と進められていたのではないだろうか。

そして、後鳥羽上皇は、親幕府派に近い土御門天皇を上皇に祭り上げ、順徳天皇を踐祚させていく。さらに上皇は順徳天皇とともに、少数の公家や武士を近づけて討幕の計画を秘かに練っていたものと思われる。

諸種の資料から取り上げれば、この計画には上皇の皇子六条宮、冷泉宮をはじめ、上皇の外戚関係の、公卿、また僧侶、北面の武士などもこれに加わった。この際に土御門上皇や、左大臣藤原道家、公卿・西園寺公経などの鎌倉幕府と関係の深い人々は外され、何も知らされない状態が嚴重に保たれたという。

討幕計画は承久二年（1220）の暮れ、ころから、漸く具体化したようで、その十二月には上皇の近臣・二位法印尊長（そんちやう）が七百の衆徒（しゅと）を集めている。また、翌三年四月には上皇の皇

子・尊快親王（そんかい）を天台座主として、叡山の僧兵を統制させている。なお、上皇もまた熊野には数度にわたって詣で、熊野三山の衆徒を味方につける布石も着々と進められていた。

また、同じ四月に、順徳天皇は、自由な立場からこの計画に参加するため、皇太子に譲位して上皇となり、仲恭天皇（ちゆうききやう）が踐祚した。

そして、鎌倉幕府へのカムフラージュか左大臣・藤原道家を摂政として押上げ、幕府側の眩惑（げんわく）を誘うようなこともあった。しかし、政治家の執権義時は公武の対立の先鋭化を充分認識し、また、京都守護や、親幕府派の西園寺公経を通じて京都の動静は刻々とつたわっており、院のまやかしは通じていないものと思われるのである。

さて、後鳥羽上皇の目的は、武家政権を倒すか、或いはこれを無力化にあった。まず鎌倉幕府の中心であり、いまや紛れもない独裁的な地位を築いてきた執権義時を討滅することが最優先であるとの結論になっていた。

その為には、鎌倉の御家人の離反を促さねばならない。そこで、上皇の近臣を通じて、在京中の三浦胤義（たねよし）を誘わせ、兄の頼朝以来の宿老・三浦義村をも誘引しようとした。胤義は忽ち（たちま）、この誘いに応じ、幕府の有力御家人の兄・義村も名利（みょうり）を以って誘えば上皇方に立つという考えを近臣に伝えた。

また、京都の動静の監視を仰せつかり京都守護として派遣された伊賀光季と大江親広の二人も、勅命によって誘引されたが、大江親広は少しの抵抗もなく即座に応じたが、伊賀光季は断りの返答をした。

事ここに至っては、もはや鎌倉幕府執権義時には、院より義時追討の院宣が発せられたことが明白となった。

執権義時

追討の宣旨

京都ではいよいよ倒幕準備ができあがった。上皇は京都守護の大江親広と伊賀光季を

誘引したが、親広は勅命に応じたが、光季はこれに応じなかった。この光季の応じられない態度は、義時の妻の兄であったため当然のことであつたのである。

しかし、この誘引の失敗は、上皇の意図が鎌倉幕府の執権義時のもとに明らかにされたということになった。もはや猶予する余地はなく、直ちに軍事行動をとる必要に迫られてきました。

こうして上皇は承久三年（1221）五月十四日に、義時追討の宣旨・院宣を発して全国に配り、城南の流鏑馬汰と称して機内近国の武士および諸寺の僧兵を召集した。このとき集まつた兵力は一千七百余騎であつたという。

またこの日、鎌倉幕府への情報提供者であつた西園寺公経父子を捕らえて幽閉してしまふのです。一方、上皇の勅命に応じなかった伊賀光季は攻められて、上皇軍によって誅殺されてしまふ。このような危急の情勢を西園寺公経はいち早く、家司の三善長衡に命じて鎌倉幕府へと伝えさせている。

また、有力御家人の幕府離反を期待した上

皇は、三浦胤義の建議によつて、鎌倉在住の御家人武田、小笠原、千葉、小山、宇都宮、葛西、三浦などの各人毎に院宣を下すこととし、院の下部（雑事に使役される召使）・押松を隠密として鎌倉に潜行させたのです。

京都の鎌倉幕府倒幕の報を持参した西園寺公経の家司は十九日に鎌倉に着いた。また隠密の押松も同じ日に鎌倉に入ったが、直ちに捕らえられ、所持した宣旨及びその宣旨を渡す御家人の名が記された書面が押収されてしまつた。

この時、執権義時の心の中は宣旨を受けた御家人の離反者が出るかどうかであつた。しかし、三浦義村が率先して幕府に対する忠誠を誓い、他の有力御家人もこれに倣つて忠誠を誓つた。このようにして、鎌倉幕府の御家人は一致団結し結束した態勢が瞬く間にできあがつたのである。

そして、義時追討の宣旨を受けた諸国の守護・地頭も鎌倉幕府の御家人の一致団結に倣い、即座に幕府に従ふこととなつたのです。

鎌倉の北条館には、義時の長男・泰時や大江広元、源氏の名門足利義氏など御家人が参集します。

そこで御家人たちに尼將軍政子が演説を始めます。鎌倉の歴史書「吾妻鏡」の文献から引用してみます。

「皆、心を一つにして承るように。これが最後の言葉である。故右大將軍（源頼朝）が朝敵を征伐し、関東を草創して以来、官位といい、俸禄といい、その恩は既に山よりも高く、海よりも深い。（その）恩に報いる思いが浅いはずはなからう。そこで今、逆臣の讒言によつて道理に背いた綸旨が下された。名を惜しむ者は、速やかに（藤原）秀康・（三浦）胤義らを討ち取り、三代にわたる將軍の遺跡を守るように。ただし院（後鳥羽）に参りたければ、今すぐに申し出よ」

このように、尼將軍政子は御家人に向かつて源氏重代の御恩を説いて、その決意を促し、鎌倉幕府を守るといふ一致団結をあらため

で確認したのでした。京都側にしてみたら、御家人の離反を期待していたが、全くの期待外れとなり、この段階ですでに勝敗は決していたようにみてもよいと考えられます。

幕府では十九日の夕刻から軍評定が行われ二つの意見に分かれた。これも「吾妻鏡」の文献より引用しますと、

第一には、「足柄・箱根の関を固めて京都の軍勢を待つという迎撃論」

第二は、「積極的に京都に軍勢を進めんとする出撃論」

であった。この二つの意見は、当初は（一）の迎撃論であったが、文官の大御所・大江広元が幕府軍の団結を維持する上からも、積極的に、また可能な限り速やかに出撃すべきことを主張し、尼将軍政子も賛成したので、評議は出撃論に決定したという。

しかし、軍議の評定で出撃論が決まったが、武蔵国の軍勢の集結を待っている間に、二十一日になって、再び迎撃論が盛り返してきた。

そこで、大江広元は、「上洛が決定した後、なお日時を無為に過ごすのは上策ではない。それは御家人たちに、種々思慮する余地を与え、ときには変心する機会を与えぬとも限らない。それ故に直ちに泰時が一人でも出発するならば、他の勇士たちは、雲が龍に従う如く、続々とついて行くであろう。」とまで言いました。

また、やはり頼朝の流刑時代からの文官の長老で、高齢で自宅療養中だった三善康信に意見を求めると「あれこれ議論を重ねるのは愚かな考えで、時間を無駄に使ったのは怠慢だ。」という。

こうして、二人の長老の積極策を聞いて、義時は息子の泰時に軍を率いて出発することを命じたのです。

以上のやり取りから見る限り、執権義時の立場として、天皇や上皇に敵対するという恐怖感が大きく心の中を渦巻いたのではないだろうか！そのために、幕府草創以来の長老のこれらの意見は、この段に来て義時の覚悟

の後押しに相当なインパクトを与えたものと思われる。

承久の乱

かくして承久三年（1221）五月二十二日、卯の刻（早朝六時頃）、小雨が降る中、北条泰時が京都に向け進発した。従う者は北条時氏（泰時の子）・有時・実時（いずれも義時の子）、尾藤景綱、関實忠、南条時員ら、北条の一族や北条氏に仕える武士わずか十八騎。決死の出撃であった。

さらに、五月二十二日のうちに北条時房、足利義氏、三浦義村・泰村父子らが出撃した。「吾妻鏡」五月二十五日によれば、北条泰時が進発した五月二十二日早朝から二十五日早朝までには、しかるべき東国の武士達は、雪崩現象のように、悉く出撃し、執権義時のもとにその名が書き留められたという。

東海道・東山道・北陸道の三道に分かれて

上洛する軍勢の総数は、実に十九万騎となり、主力は東海道方面軍で十万余騎。北条時房、北条泰時、三浦義村らが率いました。東山道方面軍は五万余騎。武田信光、や結城朝光らが率い、北陸道方面軍は四万余騎を率い北条朝時（義時の次男）進軍しました。

一方、京都では五月二十六日、後鳥羽上皇が関を固めるため美濃国に派遣していた藤原秀澄から、関東の武士が官軍を破るために上洛しようとしているとの第一報が届き、

また、二十九日には、北条時房、北条泰時が大軍を率いて上洛の途にあるとの急報が入った。予想もしなかった展開に朝廷内は驚き、大きく動揺してきた。

さらに隠密として発遣した下部の押松が、義時に各御家人に渡す院宣を取り上げられた上、解き放たれ、命からがら、義時に言い含められ、六月一日の酉の刻（午後六時頃）、院御所の大庭に帰り着いた。

義時は押松に、京に帰り後鳥羽上皇へ「東海道・東山道・北陸道、三つの道より、十九

万騎の若い東国武士たちを上洛させます。西国の武士をお召しになって、合戦をさせて、それを御簾の隙よりご覧になってください。・・・」と申し上げよ。と言って釈放したのでした。鎌倉方の進撃はもはや疑いない事実となってきた。後鳥羽上皇は急ぎ軍勢を揃えて差し向けよと藤原秀康に命じたという。ここに承久の乱は、鎌倉方と京方の全面的な武力衝突の段階へと突入していくのです。

この戦いは六月五日木曾川を渡った東山道軍の武田信光・結城朝光らが、京方への激突から始まった。京方は奮戦したもの、大将の大内惟信は逃亡、子の惟忠は討たれ、京方東山道軍は悉く退却した。そこで、武田軍は京に向けて進撃を開始した。

六月六日の早朝には東海道軍の若武者・北条時氏、有時らが尾張・摩免戸の関を打ち破り京方を圧倒していく。京方の東海道軍大将・藤原秀康は戦場を棄てて退却したが、美濃源氏の出自・山田重忠は諦めず奮戦した。

しかし、鎌倉東海道軍の兵力の差には勝てず、この美濃の戦いも京方の大敗にして終わった。

翌六月七日は東海道軍と東山道軍が合流し美濃垂井・野上宿で軍議を開いた。北陸軍の上洛は近いが、これを持たず、すぐに軍勢を整い京方を攻撃する布陣を決めた。

〔勢多（瀬田）〕北条時房

〔手上〕安達景盛、武田信光

〔宇治〕北条泰時

〔芋洗〕毛利季光

〔淀渡〕結城朝光、三浦義村

また、翌六月八日は、京方の藤原秀康は、傷を負いながら帰洛し、尾張・摩免戸での敗戦を報告した。院中は騒然となり院近臣の公卿も宇治・瀬田方面の防衛に向かうこととなった。

追い詰められた後鳥羽上皇は、比叡山延暦寺の僧兵に期待をかけ、比叡山に御幸したが、

延暦寺の返答は「衆徒しゆとの微力では東国武士の強威きやういには防ぎ難し」との冷たいものであった。後鳥羽上皇は、急ぎ熊野・吉野の悪僧一万騎などを頼り、近臣の公卿や僧侶らを含めても、総勢は二万数千騎で防衛にあたることになった。

承久三年（1221）六月十三日、雨が降りしきる中、北条時房は瀬田、北条泰時は宇治、酉の刻（午後六時ころ）にては毛利季光と三浦義村が淀・芋洗に向けて出陣した。

宇治に向かった泰時軍の三浦泰村と足利義氏が先陣を切って宇治橋を攻めた。これに対し京方は主力一万騎を宇治に敷き、雨あられのごとく矢を射かけてきた。鎌倉方に死傷者が続出した。宇治橋の橋桁はしげたの上では飛び跳ねるように京方の奈良法師が攻めていた。

これを見た泰時は一旦攻撃をやめるように命じ、渡橋作戦を切り替えて、渡河作戦とこくわを敢行することにした。

翌六月十四日、配下の水練達者すいれんの芝田兼義しばたかねよし

に浅瀬を探らせたが、前日の大雨で川は濁流となり、容として浅瀬は見つからなかった。漸く土地の老翁から情報を聞き出し、泰時に報告した。

佐々木信綱以下鎌倉武士九十六騎が轡くつわを並べて渡河作戦を開始したが、激しい濁流にのまれ溺死する者もでた。京方の抵抗もすさまじく激闘が続いた。そのうち、民家を取り壊し筏いかだを作り、それに乗り対岸に渡り始め、次第に京方を圧倒していった。完全に鎌倉方の勝利が見えてきた。

一方、瀬田でも北条時房率いる鎌倉方が優勢となり、夜には京方の藤原秀康らは陣を棄てて帰京した。淀・芋洗でも毛利季光、三浦泰村が京方を撃破し、宇治・淀・芋洗における激闘は、鎌倉方の勝利が決定的となった。

宇治の激戦に勝利した北条泰時は深草河原に陣を張り、明日の朝入京する旨、親鎌倉幕府派の西園寺公経に使者を送った。

大乱後の京都

承久三年（1221）六月十五日、北条時房、北条泰時をはじめとした鎌倉方の東海・東山道軍は入京を果たした。そして、辰の刻（午前八時頃）後鳥羽上皇の勅使・小槻国宗と六条河原で対面したという。北条泰時、三浦義村らは下馬の礼を取り、勅詔ちよくじょうを承った。その内容は「義時朝臣追討の宣旨」の撤回と今回の大乱は「叡慮えいりょ」、つまり、後鳥羽上皇のご意思によつて起きたのではなく、謀反を企む「謀臣」が起こしたものである。今となつては泰時らの申請通りに宣下するつもりである。というものであった。泰時らは承諾し、武士たちの禁中参入を停止すると返答した。

院宣を承った北条時房、泰時らの軍勢は、六月十五日の巳の刻（午前十時頃）、京都における幕府の拠点「六波羅」に到着した。北

条朝時が率いる北陸軍もやや遅れて入京した。

泰時は六月十六日に執権義時のもとへ戦勝報告の飛脚を送り、それは六月二十三日の未明、丑の刻(午前二時頃)に鎌倉に着いた。泰時は戦勝報告とともに戦後の処置に関する諸般の指示を求めた。

報告を受けた義時は、喜びをかくしきれず、天皇・上皇に敵対する恐れや、身にかかる呪縛の不安から解き放たれ、戦勝後の京都方への政策を自信を持って推し進めていく覚悟を決めていくのです。

後鳥羽上皇は、幕府の要請に従って、この挙兵に関係した人々を幕府側に引き渡した。これに対し幕府は人身の動揺を抑えるため寛大な処置をとっていた。しかし、そうした寛大な態度の中でも、御家人でありながら、院方に立った者に対しては、厳刑を以って臨んでいくのです。

そして、今後は、鎌倉幕府の要求がそのまま通るような公家政権を実現すべく、皇位についての許諾きょだくに関しても鎌倉幕府が握り院政の基礎を押さえていくようにしたのです。こうして朝廷の改造を行い、鎌倉幕府の意のままになる公家政権を実現させようとしている執権義時は、いよいよ事件の中心人物たる後鳥羽上皇以下、これに関係した皇族の処置を開始していくこととなります。

後鳥羽上皇を隠岐おきに、順徳上皇を佐渡じやんとくに、六条宮を但馬に、冷泉宮を備前に、それぞれ配流はいりゅうし、その行宮あんぐうをそれぞれの国の守護に命じて護衛させることとしたのです。この際、土御門上皇は局外者であったため幕府はこれを処分する意思をもたなかったが、上皇自身の希望で土佐に移ったが、幕府は、奉侍が不便との理由で、まもなく都に近い阿波に移したのです。

なお、義時は、責任者の処罰と共に、京方に味方した公卿・武士の所領を調べ、その数

三千余カ所を没収し、これらの没収所領は、この乱の勲功者に配分するようにした。

承久の乱の結果、幕府創設以来の、朝廷と幕府との間の政治的力関係は、完全に逆転し、武家政権の優位が決定づけられたのです。

この一ヶ月の内乱を端緒として、承久の乱の出来事は、初めての「武家政権」の誕生を執権政治として成長させ、我国の歴史上に刻み込み、以後、近世の江戸時代までの約六百年間「武家政権」を続けていく「大転換」となった重要なポイントの「承久の乱」と言っても過言ではないと言い切れるのです。

執権政治の確立

執権義時は、源頼朝が草創した武家政権をここに見事に成長させ、古代より連綿と継承されてきた公家政権を無力化し、武家政権での全国支配を実現させたのです。

しかし、承久の乱決着の以前までは、畿内近国や西国には鎌倉幕府の直接の支配権が存在せず、これらの地域に関しては幕府も、ことごとく院宣をわずらわして、その意思を伝えていかなければならなかった。

執権義時には、今や西国までもが鎌倉幕府として直接の支配権が及ぶ地域となった。従って、そうした状態にふさわしい行政機関が必要となり、従来の京都守護の権限を包含して、より広範な権限をもつ六波羅府を設置することが必要になってきたのである。

京都の治安が治まるに従って、幕府軍は徐々に帰東していった。執権義時は、戦後処理をしていた南北六波羅の時房・泰時をそのまま京都に駐留させ、これまでの京都守護に代わって、朝廷の監視と京都の治安のことに当たらせることとした。

これが六波羅府の起りである。六波羅府の主脳者は「探題」と称されることになった。六波羅府の当面の任務は、京方の所領没収の

事務、戦後の所領関係によって生じた公武間の紛争の処理、及び京都の新政権に対する助言などを担当する役割を持ったが。究極の目的は鎌倉幕府の政治組織の上での、一つの重要な出先機関として、畿内近国および西国を統括することが目的であった。

六波羅探題は、南方・北方の両者を置いたが、これは別々の機能を果たすものではなく、両六波羅として一個の政治的機能をもった。

そして、ここでは、重要案件のみ鎌倉の指示を仰ぐこととして、尾張以西諸国の小事は六波羅探題が独断専行できることとなった。

この六波羅探題は、時房、泰時のうちも、南北両探題は、代々北条得宗家が補任ぶにんされ、足利尊氏によって六波羅探題が攻撃されるまで、畿内近国および西国に対する支配行政として、約百年余の長きに亘り、その出先機関の役割を果たしたことは非常に大きかった。

このようにして全国支配の機構を構築するための発想は、京都の下級貴族出身の大江山、三善康信の建議もあったろうが、執権

義時の生命の危険を幾度も潜り抜けてきた政治的知恵の中から創出されたものとみてもよいのではなからうか。

京都の公家政権を無力化し、執権制度をさらに強固なものとし、鎌倉の將軍を摂関家より拝戴し、それを「お飾り」とし、さらには、三代執権となり、後の歴史上に於いて「名君」と称えられる嫡子・北条泰時も後継者として育ってきた。

しかし、執権義時は元仁元年げんにん（1224）六月十三日に六十二歳の波乱万丈はらんばんじょうの生涯を閉じることとなったのです。その日は奇しくも三年前の承久の乱に勝利する宇治・瀬田の戦いの最後の打撃を与える日でもあった。

北条義時によって鎌倉幕府の執権政治は確固たるものに確立はされたが、義時の飽くなき政治意欲は、後を継いで三代執権となった嫡子・泰時へと受け継がれ、やがては、さらに大きく開花していくことになるのです。

「あとがき」

鎌倉時代の「中世」を学んで、鎌倉の地を案内するようになり、少しずつその知識も蓄積して参りましたが、進めば進むほど、この歴史の面白さ！私にとつてはたまらない面白さを一実感してきました。

そして、皆様と鎌倉時代からの武蔵国の、まだまだ、ほんの一部の地ですが、一緒に散策し、その地ならではの感じられない体験も数々して参りました。

ここに、ZETが令和四年の大河ドラマで「北条義時」を取り上げるとの情報に出会いました。そこで、これまで微力ですが鎌倉時代を学んできた自分なりの力が、どの程度かを自分自身が知ろうとのこととなり、「北条義時物語」へのチャレンジが始まりました。スタートしたのは良いのですが、これまでの小さい知識では容易に捉えられないことの壁がドーンと待ち構えていました。そこから自分なりの文献探しが始まり、源頼朝の時代の保元の乱・平治の乱から、改めて見返す

ることとしました。そうしたら、鎌倉樂しむ会の企画責任者として発表してきた文章の幼稚さも目立つと共に、忘れていたことも浮かび上がってきました。

そこで、少しはこれまでの経験を活かして、鎌倉樂しむ会の皆様に、少しでも私の書く文章の中味が伝わるようにと心がけようと思うようになりました。その為、これは！という文献に出会った時には、繰り返し学び、私なりの解釈ができるようになると努めました。

今回の文献を調べ、自分なりの解釈をしてきたところ「北条義時」は、一言で言えば、「強運」の塊かたまりの人ということに尽きるような思いです。

源頼朝の流人時代に生まれ、姉は頼朝の妻となり、頼朝三十四才の平家打倒に父・時政、兄・宗時と共に参戦し、兄・宗時の戦死により、「偶然」にも将来の北条家の当主となる資格が転がり込んできた。当初は、父・時政と行動を共にしていたが、その父を追い出し

てしまうのです。

この辺りから、頼朝の冷徹なまでの政治手法を学んだのか、元来持ち合わせていた義時の器量もあつたのであろうが、次々とライバルを追い落とし、また、源氏三代の根を絶やし、ひたすら、「頼朝の御家人の土地の安堵」から「義時の御家人の土地の安堵」への移行を目指し、最後には、義時本人が驚愕したであろう後鳥羽上皇の仕掛けた鎌倉幕府滅亡のシナリオに移っていくのです。

このように義時は、時には相手を滅亡に追い込むことがあつたとしても、私なりの文献から汲み取ったことは、常に相手からの挑戦を受け、跳ね返しているように見受けられるのです。そして、時には命の危険が迫る修羅場を潜り抜け登りつめていくのです。そこには、義時は、頼朝以来の宿老・大江広元、三善康信の諫言かんげんを受け入れる「度量」も味方し「強運」を自分の中に倍増させていくことが感じられるのです。ご笑覧され、このことを少しでも感じていただければ幸いです。

敬具